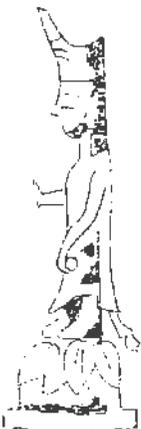


一週毎にスカウトの諸君へ

委員長 小川 玄 諭

あつと いく月の一年、本当に短く感じます。
 何事でも初めは骨の折れるものです。これびいのレバ双葉となり
 餅となり 皮となる。然し 38回はやつと身をふいて来たばかり
 です。私達のスカウト運動は、思ひのさかろのさけは無い
 心と心が 固く結び合つた 固い鐵の練り心で結び合つた友の氣
 です。スカウトの仲間には 幾多の困難する様な事柄がありま
 す。或る面では キャンピングの急の運搬車を作る為には 誰のお世話に
 もならないで 班長から 次の班長へと受けついで5年とそれ
 を統けて ついに班用品とした例もあります。勿論有志の育成食
 の援助と助けで……これだけは僕達の守でと……また 班の中に幾
 多の少年が世帯一人の班長の為には 全員助け合つて立派にスカウ
 ティングを歩ませた話。悪い仲間に入りかけた少年を皆で更生した
 その少年の
 就職して病にたをれた時 “僕はスカウトのお陰でよくなつた。死
 んだら スカウトの正装で死んで欲しい。”等
 僕達の恩も種子がら、双葉が出はじめたばかりです。

ボーイスカウト創設者バーテンボウエルは B.S.運動
 を説明し 簡単にいへば、この運動の目的は民衆の教育
 の創手側をして、健全自給にして幸福な人格ある公
 民を教養する為である。私に教育者や、修身講話の改
 変に依らず、それはある実行の自覚教育に依つて少年少
 女を訓練任務とするものとされる。野郎、冒險的なこと
 出陣の性質、樹木のすることや、技能、他人に対する
 奉仕等の実行によるものである。
 その結果として、青少年の心身に少年がまた自覚的に



この運動に備打しておく事実は、この方法の人
 望のあること、奉仕の精神が後に発奮する
 事を実証して居るものである」と 健全、有
 意、幸福を齎し、世界平和に寄与して居る。
 まず 紅金の標打の出来る真心の改造から着
 し、教育の内容の充実を計つて居る。

これを教育的に 人格、技能、奉仕、健康の四方面より備
 打たされたものである。具体的に例、誓に例を取れば 武士道の精神を次
 の各取に依り少年の人格を涵養し少年の間に善良なる公民素質を培
 造させるにある。

- 1 観察、従順及び自己信頼の習慣を訓練する。
- 1 公衆に有益な奉仕と少年に有益な技能。
- 1 他人に対する忠誠、思いやりの念の涵養。
- 1 少年の肉体的発達と衛生的増進を計る。

人 格
 奉 仕 と 技 能
 健 康

と述べて居る。バーテンボウエルは今上天皇に 「小生等は日本の武
 士道の精神を少年を教育するものであるといつて居る。何故に武
 士道を高唱して居るが或はこれと近似した精神を以てして居るが？

「各口民、各時代の強い人々は常に名誉の旗を持つて居る。
 日本の武士、甲斐の騎士、米口の網球者、等々……此でこれ等の人
 々には名誉の旗がある…… 公民の旗即ちスカウトの旗を造つ
 たと言つて居る。此の旗を言論家は批評して、この旗を吾等にあ
 へるに当つて、世界各口の道徳律を短文の間に包含せしめた彼は
 積極的方法で表現し、その基準を少年の前に置いて、これが道徳を
 試みることを求めた。彼は小言を言はずこれを少年に激励し、禁止
 せずして野郎を圓つたものである……と評して居る。

武士道の情を本質に、旋となり、過激思想、革命的企画に対する解
 毒術と世人に認められるに至つた

個人として他人の世話にはならないが、他人の世話が出来るとは
 個人は殊業である。要するに個人各目的の努力と仲間団結は生物に

一貫した生活の理法である。

政に自己信頼の増大と没我的能力 率直、平靜なる勇気 聰明な意見は社会生活訓練の根本向標となる。人間の社会性の本能を覺醒して、生活教育の根柢をこゝに置いたものである。



早いもので一年を迎へることになった。今日まで随分感を通つたのだと思ふ。或前 野後を通して十指にあまる。

崩がある会合も 同族会等の時でおおりになつたのですが、この間に昏へることは出来なかつた。受も者がなかつたのが本當なのでした。あらゆる役も辞退し初めたりもこの時がら そして隊を造り初めたり次第。隊長に一年を築けるの事 自力の御強と... その時掛り、隊長の努力も水の泡誰一人築き上げてい

冬休、では新隊期がりと果出してカブ、ボーイと出来た。団を創める時、最初軌道に来る迄は大変。隊長のサビヨンに一音併、30回としてある。実際運営上はると 青年隊と ボーイカブの諸行事は何かと行がぬ 思ひきつて 団を分けて3S 団として開いた。もともと無理だのたのだとあとで解る。

隊は軌道に来つた。青丘会回季良の出席良好、初めてカキマンブ その報告を聞く なんと個性の強いスカウト達と 一寸驚く。それも取の向の音併、それだけにスカウティングが軌道に架り初めて 伸びた。スカウトらしく。自分でスカウトの型にとらわれてその視野が、スカウトの型に引き入れ様としてゐるのではないが反省を取極苦痛だ。早く早くとしりあげてたのがも知れない 二人の向に 一年が来た。一寸早く来泊たのだらうかとさへ思ふ。上陸し、隊長が直派に出来る。嬉しい。

キャンプでの技能訓練の心得

(平素も同じである)

- 話 簡単に要点を忘れぬこと。
- 絵 話と一緒に出来る限り黑板を利用し 説明図を作り利用する。
- 実演 実際に用具と材料を使用し、実演して見せること。
- 感化 都合で本音の聲を見せられぬ時 感化に仕込む。

要点を強調する様に、実際にな用し、練習、テストの熟練すること。

班 に対して

- 彼等自身のことを、やり遂げるための全責任を負はすこと。
- スカウトを信頼し、自治能力を認め、班長に対し、程よく協力をあかえること。それは若者自身も大変な努力である。一寸やつて出来ぬからと、その仕事を横取してはならぬ。
- 自分の権力を他人にかつことを行わないで、ボスの様に振舞い自分の得意なものを見せびらかす この

ことは子供の品性を 面任間活を台無しにして居る人である。

この様な人はスカウティング以外の団体で教へてもらふべきである。

例えば 班活動等で、何かやらぬばならぬ時

遊んでそれか おもむくか 何が提案を求めた時 どんどん 思ひ付を出すか、持っているか、でわかる

B-P は最良の結果を得るための手放しの責任を負はすことで、一部の責任のみでは、その成果もまた一部分的なものとなるであらう.....

と言っている。班長に一切を引受けさせ、班員と一緒になつて彼等自身の問題を考へさせ、動き通さすことである。干渉は少く、でもその求めは底へぬはならない 類知く、失敗は避けられない...然し 温く迎へてやることである。

◎ 態度化の手だて

スカウトは觀念ではできませんでこそスカウトの觀念を破る5つの鍵を信へまはさう それは.....

① それは 君が自分で考えたのが
誰かに教はつたのが

(主体化)

② ・ 外の場合もあてはまるの
か (一般化)

③ ・ 真にそう思ふのか
(真実化)

④ ・ 本音でやれるのか
(実践化)

⑤ (現実化)

▷ 今までそんな時どくしか
が (過去の経験から
して)

▷ そのことを今どく思ふか
(批判)

▷ これからどくせるか
(実践意識)

◇ 自己防衛のため

① 現実忘却 幻想、伝言、征服
者へ同一化

② 現実歪曲 合理化(ハリケーン)
投射(なすりつけ)

③ ・ 補償 けちつけ、悪口、
誇示

④ ・ 逃避 退行(子供っぽくなる)
ヒステリ、仮病、嘘言

⑤ 現実放棄 反抗 攻撃(お笑)
(非行)

○ 自分の意見やり方で考えます

① 価値の高低は多数決では決ま
らない。

② 結論の多数性と価値の序列を

a 色々な解決法を見とめながら
b その中で自分のやれるやり方で
c 今までより一歩高いものを選び
d 本気でやろうと決意すること

③ しゃべっているが考えていない。

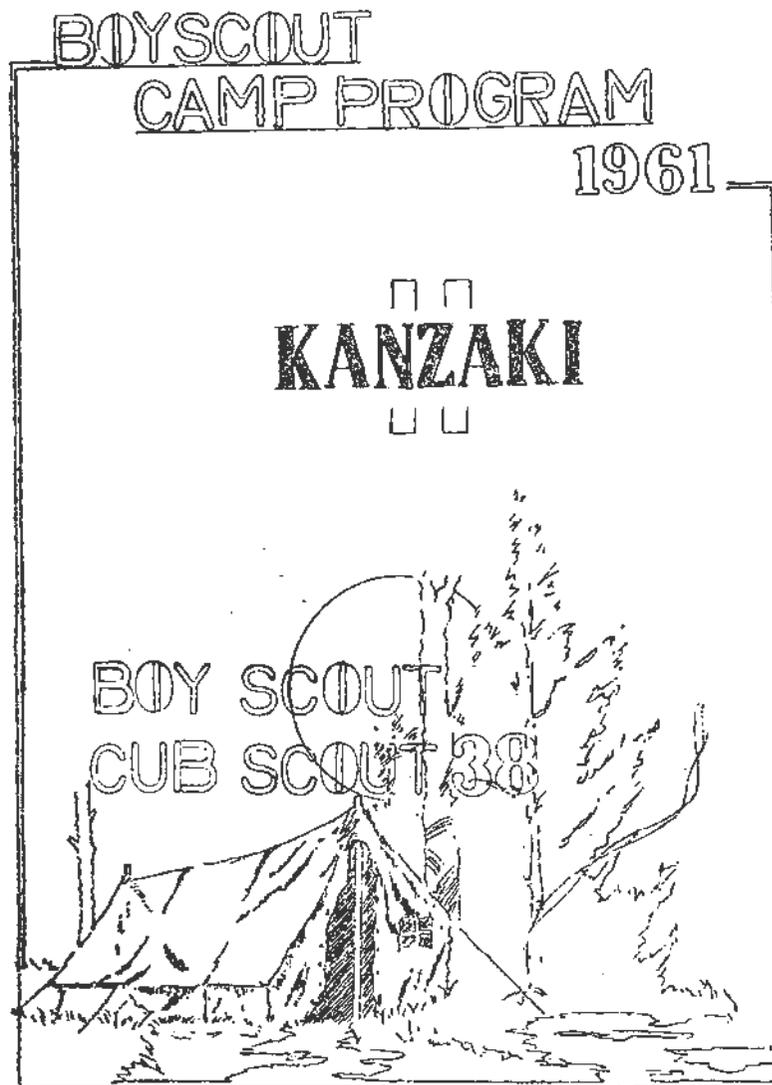
やりおせなければ やろうとも思
つていないことをしゃべる。

このことは一つの英徳を教えるた
めに余多の感情(羨望と嫉妬と見
栄)を種々つくと音ク怒るべき
発し元であることに気がつかねばなら
ない。

④ 静な雰囲気、静なスカウトと
しての決意を導く。

批判、評価による自己還元(羨望、
即ち自分が自分から約束するといふ決
意、自分が自分と結ぶ世界、この対
決こそ、スカウトに取って、最も大
切なことである。

キャンプの「しおり」も先生のガリ版製。左下のBOY SCOUT CUB SCOUT 38 は赤の2色刷りだった。



(キャンプ 訓練 訓練 訓練)

4.38.合同プリント

スカーフは心と身体もスマートである。



探検品は、大抵の中の小袋の原則を依りて
必要にして最小限に包むのである。

個人用品の部

その1 衣類

スカーフ コニホム、長ズボン、シャツ2枚、
パンツ2枚、履物(パジャマ) 履物、ジメケツ、
雨具、毛布、軍手袋、木沓

その2 洗面具

歯ブラシ、歯磨き粉、石鹸

その3 食器具

飯匙、汁椀、湯呑、皿、箸、サジ、フタ、布巾

その4 修理具

修理用品-針、糸、ボタン、修理用油、ハサミ

その5 靴手入れ

その6 訓練具

ロープ、ナイフ、磁石、手旗、筆記具、

地図、分度器、コンパス

その7 灯具

懐中電燈、ロウソク

その8 通信具

電筒、切符、封筒、便箋

その9 食糧

米、食分、砂糖

その10 一般用品

細紐、日記、ノート、百円券、鉛筆、マツチ、
ハンカチ、履紙、木筒、石新簡、持袋、
自分の旅用用品(例、写真機、写真用品、
湯中履等)

班の野營用具



天幕類、天幕用頭品一式

支那、鍋、予備組、フライ

工貝類

シヨベル、鎌、木屐、斧、山刀、
鋸、釘、金釘、金線

炊事類

鍋、飯釜、湯鍋、フタ、パン、
水桶、湯瓶、筒、肉(汁、餃)

醤油、柱炭、にがり、味噌、マッチ、茶袋、塵芥、(風呂)

燭、炭、燭、ローソク、マッチ、ランタン

食糧類、白米、雑穀、野菜、干肉、干魚、佃煮、梅干、漬物

腐、砂糖、味噌、醤油、食用油、バター、ラード、カレー

メリケンゴ、饅頭、茶、紅茶、コップ、ミルク

衛生具、救急用品、蚊帳、線香、切歯、剃刀

文具類、地図、磁石、時計、電筒、ハガキ、電報、郵便紙

訓練具、手旗、ロープ、参考書、防水レンズ

その他、班の持ち品記入欄

自然の中でのキャンプ、食も住も自分達で作り、程々雑多な仕事に關係し、猶且あの豪雨と土地柄に置かれた條件に素手で、赤標などにぶつかるより外ない條件でした。

その中で 自然の厳しさ、それを乗り越えて行く人間の力とがもし出される人間関係、何々人の人間性... 寺々充分身証下さいました。外なる自然に接し 内なる自然(身体)と關係し、身体を通してその苦しみを味はれるばかりでなく、自覚しにその苦も踏して行つた事でしょう。その事によつて それに伴つて自身の心の動き、自己との戦いも自分でとらへられ、てしほり。誰がらも強制されることなく夫々のもちまへで味はれた事でしょう。外なる自然に、内なる自然で降することは文化の恩恵に被しながらあたりまへと厚の、何も感じていない私達にそれを自覚させるばかりでなく、人間の本来の原始の姿に還ることによつて人間的な力を生々ともみかへらせ、人間の持つ逞しさと 威、厳、と言ひ集團を通して、それを媒介としての人間關係の慈愛も、温さも可能となる。このことは申すまでもなくスカウティングといひ組織体の力強さと温さを通して可能なので、それに加ふるに指導者の指導技術によつて鼓舞されると申せましょう。

人間の自然とは 私達の大きな研究課題と存じますが、外なる文化に對し内なる文化、この基礎の上に立つ事や、指導の務めでしょう。自然の美と驚異、宗教への導き... 内なる自然なる生命、只不思議と申す外ありません。無敵の人類の生命の上に生かれ、その新彼に生物の歴史があります。そこに自ら神祕と畏敬を感ひます。その自覚の上からの出発でなければ、宗教のメッセージの幸福も、確認出来ないのではないでしょう。その確認こそ終業性をばらみ、永遠に進展する生命と申せましょう。

以上実修所事後課題を説き及んで、少し饒りのあつた矣。またその原稿文の御参考にして載ればと書きしりました。夫れをお花びして御叱咤をお待ちしています。

三ヶ月に渡る御研鑽の御援助頂きました。課題諸般に渡る御指導と御努力に感戴致しました。その中を一応分類といつて形を取りますと

実修所の体験 原級年向プロ 規制 指導目標と指導技術 育成会と指導者、宗教と倫理 訓育の展開等に一応着まつると考へます。これ等をとりまとめ、私の所感としてお送り致します。

スカウティングと人間形成に関する矣について

熱意ある所信に全く同感であります。私達スカウティングの道を歩むものゝ共通の願とは何んでしよ。恐らくB-P最後のメッセージと申せましょう。更に言葉を加えれば、生活條件である衣食住、娯楽、趣味、その上の心のやすらぎでございましょう。

然し現実は一休どりのものではなく、スカウティングにあつては人間形成の基本を < 自分が自分に呼びかける > その事を基礎としてスカウティングといひ方法で訓育する、自分を自分で引受けられる訓育と申せましょう。その意味で指導者自身も同じと申します。

ちがひ おきてに罰則規定や、記録規定のないことは木末性に属

る人の歩む道の方角付であるがらといへます。

よく真理であるといひ言葉を聞きますが、そのことは学術的な知識に對する言葉であつて、スカウティングの場合、身体を通して味知る智慧でなければならぬ。その意味で、< 真実 > でなければならぬのではないでしょう。

さくれと観念からスカウティングの人間尊重とは、決してあまやがされることではなくて、スカウトとしての肉面からの自己への厳しさ、その表現が規律といひ形で出てくるものでありと思ひます。

指導者自体の生活と

奉仕活動

仰せの通り、満された生活の中での奉仕、反対の立場の人、夫々の環境に左右されながら、自分で生活を

振るあげる

自由の主体であり、選擇、決断、決意の自由を持っています。

自分の進め方でもよほど委つてくるものです。只近代生活の弊害は表面は自由の様で、真の意味での自由はなく私達の内面の生活も、社会も波立っている。内面的の覚醒ほど大切なものはありません。言葉をあげれば、自分の思いのままに解釈され見方がなくて……私達がよく誤りを犯すことに指導というその言葉を常態的に解釈してしまいますし、自分の体験を通して、自分のペースに引込んで、思ひ通りに指導して満足している人があるようですが、そのことは或る意味で、自分のペースで善悪をあげつらうような、外部からの物指しで、若い少年を押し計るようなもので、決定的には、自権を失くす人と人間として生きる感覚を失くさせるのと同じように、私達スカウティングを導く指導者としてその私自身の生活の事実を感銘しているそのことを自覚すること以外、私の道はないのではないのでしょうか。同じスカウティングの道といへ、20人または20人夫

の道がある筈です。スカウトの感銘訓練といつても、究極はこゝにくるのではないのでしょうか。(大阪連盟のはんなん地乙隊肉紙を転んだ)もしスカウティングが外面的価値に依りものであるならば、自主性といつてものが発露出来るのでしょうか？

訓練の中

特に覚悟まじりて美を書き添へます。少年達には、やはり人間としての基本的欲求、本能がらくる欲求があります。スカウティングの初歩的段階に於て大切なことは、その欲求を肯定しつゝ、精神面を引出して行くこと、がら初まります。班、隊を通して価値あるものとして高められて行くその過程を豊にし、その実践の中で、明にして行くためのプログラムです。がらスカウティングの目的と結びつく見通し……が私達指導者として心懸けねばならないのではないのでしょうか。従つて更に進級の為の練習、觀念的な反省では、いつしかづれが出て来ます。少年/人/人夫々のもちろめがありますからそれと答えるのが指導内容で、目標は、班、隊を通してのまより(無活動)と自治を体験して生れ出る規律であるといふ

技能の指導に依りましても、指導者の判断にのみ依りまはれてしまふと目的とつれてしまひましよう。スカウティングの過程訓練とは、目標、教育長に至る途中と言つて、指導者ではスカウト訓練は成りたらしません。その過程/々々印別着美と結び付いているので、常に現在の現時点に於て訓練は可能なもので、その時その時に意味があり、価値があるのでその進め方を意味します。

○ 更に今後の進級の

進級の為の立案に対し

少年自身、自ら進み入るべき少年達の進め方スカウトとらにめるために、自身楽しんで向うもの、在り方であること、指導者の立場がら放しますと、自分のもちろめを自覚させること、進級目標は、それを通して受身の立場にある少年をして、自ら進んで受けるという能動的立場にがへること、で自己を試し、自ら試みる、訓練で目的への手段である故に優劣の判定に促はれてはならないと思ひます。従つてスカウティングは方法であるといはれることは、その中、そのもの、中に本来の意義が

らまはれていることを御承知といたし、できれば形式や方法が異なるとして、進んでしまひまからず。

◎ 宗教的訓練と倫理の考え

の限りを

私達は、人と人との間に存在するく、汝と我との関係に於て存在する倫理的な存在であり、否定することは出来ません。仰の通り相対的価値批判の上になら立っています。宗教はその価値批判を超えて、身証するものが宗教ですから、倫理が宗教に介入し、時は宗教の純粋性を失くします。善悪の起るに絶対善悪の世界です。個人生活、社会生活の基盤の上にある精神文化といへます。このことは長くなりますので省きますが、B-Pは感謝と奉仕の美徳を通してといはれる意味を込めて、

未提出の方は12.10.現在10名です。促進して下さい

誕生と いのち

仏教章取得のための資

第一回会合で誕生について話し合った。少し難かしかつたようなのでとりまとめた。

釈尊伝；親鸞伝については、講義もあつたろうし、重版をさけてまとめてみよう。

私達にとって、その生涯を通して 人として誕生したという意義、人として生きて行く生き方、そして人として求めて行くことの出来る道を明にして下さつたこと、又釈尊が人間は“めざめるべきもの。”と教えられ、人間はただ、その日その日を無意義に日暮しすることでは、満足出来ない存在であり、何かを求め歩みつづけるものだということも、そういう意味を人間の歴史の中に明にされたということに於て、万人に達し、他の 偉人といわれる人と相違する点である。

人としてこの世に生を受け、人になろうとして歩み出されたその歩みは、まず、人として生れた という事実がどんな事だつたのかという事実から初まり、そして、よき人（指導者）の言葉を聞き、その言葉を聞いて生きている人々に出会うことによつての感動と、聞き教えられたものとして、その身の内に、自覚されて来た使命に生きる歩みが開かれ、そのことが、私達の生涯を人となつて行く歩みへと呼びかけ、呼びかへしてくれるのです。

釈尊、親鸞聖人の時代背景、その環境についても聞いたことだが、その中でどう歩まれたか。

私達も生れたということは、そのいのち、というものが、身体と環境を持つたこととでしょう。 その環境とは、まず家系と両親ということですよ。

すくなくとも、私達は生れてくる時、牛乳出る世界、環境についても何も知らなかつた気がついたら、唯れにも代つてもらふことの出来ない、この私の人生があつた。また生れたというその出発点に於てあたえられていた条件……、その時代；人種；性別；そして家庭環境等々具体的な内容は、ほとんど限定されていたと言えます。とすると、そうした中に父母を縁としてしてのいのち、単に産みおとされたとしか考える人が、何故、勝手に産んだなどとなることになるのであろう。

しかし生命、いのちは いかなる人といえども作ることは出来ない、私は単に産みおとされたのではない、自らの（業識）意志、生れ出ようとする “いのち” が内なる因であつたという事実に深い自覚にめざまされ 自分の（業識）を内なる因として、父を縁として、父母によつて表わされる環境のすべてが、この私のいのちを具体的に育て、歩むための実践のための大きな外からの縁として、これあるが故にこそ、私のいのちを育てくれるものであつたと手を合はさずにはおれないのである。

道を求めて／…

仏陀はその誕生に於て、七少あるいて「天上天下唯我独尊」とうたわれたと説かれて

いる。七少とは六道を超えるという意味で特に七少あるいて とあるあるくとはその人によつてその人の人生に長、短、はあはけれども、その人生は歩くこと、つまり、道を求めて歩くこと、そして、その道を本当に、自分のものとして成就する、成しとげることである。

人間が生れて来たということは、単に、衣、食住、の満足、食べられれば満足であるなら動物と何等かわらない。それだけでは満足出来ないのが人間であり、本当に自分に応えられるものであるなら自分は損をしてもいいというのか人間である とすれば、どうすれば満足出来るのか。一体何を徳たいのか。 そこに私達の人生が道を求め、自分のものにする、自分のものとして成就する。 それをいう意味をもつてこの世に生を受けたのである。自身、尊いねうらのあるこの私であるという意味をあらわしたのが誕生であり、また誕生そのものの教えでもある。歩みつづけることをやめれば、もう人間でないといつていいでしょう。

スカウティングで道を歩む とか 道を求めて歩むことかスカウティングであると教えられた根拠はここにあるのである。



わからないこと 等

所感など この余白に書いて下さい

我等の向には脈血が流し通ひ、円き輪、半に聖火は赤々と燃ゆ。赤きもの、是我等の血潮、我等の誠心。燃きまの、是我等の血潮、我等の誠心。今や火は一ちらがるなり。我等若人、胸の中に脈管の中に縮々として遠くうなきが如くなるを覺り、斯く如きの境、夢と言はんか、當らず。恍惚と言はんか、當らず。幻覺と言はんか、當らず。皆々然らざるなり。是こそは儼然たる事實なり。我実なり。認識あり。信念あり。さてまたけしき、赤きこの事實の、他に存せざるを知らりと言ふ者一人にちらざるを信ず。一形一色、一舞一踊、益、汁に入り、妙なること比ひなし。我等時の過ぐるをも忘れず。吾、肉せりして、この美しき境に酔ふ。大地も又また我等と我等と共に茶む。やがて中なる一の聖火は、次々々々に小さくなりて、消えんと欲するに至るも、我等の胸の中なる聖火は猶未だ了えず。我等亦々の永劫に我等の行手を照すべきことを信じ念ひつゝ、静かに合掌して眼を閉れば、今日一日の愚王れし幸と御佛、その他、萬物の恩かりと感謝するの情勃發して起り来り。我が五体はありてなきが如く大自然に出入り、なごてあるが如く制止に付めり。再び眼を開けば、中なる聖火は早や薄き煙を發して終に消え入りたり。されど、あゝ、この明きやは何の故ぞ。勿論、皎々白き月光、明かに萬物を照し居り左ればなり。されど、果して豈然のみならずや。吾思ふ。爛々たる聖火、吾人の胸に猶在り燃えて、銷えしれば暗迷ならんとする心を、彌蒙に光明に導き、崇高なる光の路、心の路を我等に示せるにあらずや。此の光の照す所、越く所、人生に如何なる苦難ありとも何物が虚せざるものあらんや。是に於てこそ人生は

始めて、その意義を乞ふし、依つてアナクサゴラスのいへる、「天と天位とを造する秩序の軌道の爲に又日本口説として、創造によつて世界の創造に参加するために、然して八結一字の大運交具現のために、生を棄けたる意義を、改めて「ミバク」と見出し得るものである。

燈火についで

井辻憲一

自分ば燈火が非常に好きである。特にその空回をば他に経験した事がない。空回漸く進む頃、吾等が得意の噴劇に期待をかけて、燈火場に来る。はやる心を抑へて……

亦遠くは同空回を覆うて存在する自然の偉大さよ。自然は吾人の眼にその百分の一の姿にだけ見せむべしとも思はれず。如何に「人固は偉大なり」と言はんも、豈ん類は吾人の自然の足下に、伏すに足る價値を有せざる「と知れるや。得々として自然を征服せしか如く宣言せざるも、自然として、身の一毛にたに、感ぜずと感ぜしめざるのみなり。自然は感は像し、或は像に、吾人の心と眼の間に現はれたり。龜々乎たる深山は巖穴、洋々乎たる大海は慈母に似たり。吾等、一時も運かたに、一時もせぐ、吾、永劫にその胸に抱かれんと憧るなり。即ち同志相業して、この感ぜしき白雲青松の湖畔に、偉大なる自然の胸に入らんとして来れるなり。あゝ、吾等は自然よ、汝の心安、此の如き吾人の小欲を拒むには余りにも雄大なれ。汝自身、汝の眼を吾等のために伸べ向かんことも。汝に比すれば、一瞬の間に足らざる生に臨みて呼吸せる吾人が、汝の胸に入らんとするを好みして之を助けよ。吾人にして若し、汝の胸に入るに躊躇せる者一人だにあれば、如何なる大禍も吾人の上に臨ましめよ。我等、さそ甘露、激水として流くる吾人なる者にはあら

がらも銘せよ。我等一月は血盟の士、水魚の好成せる洞をにして、汝方偉大なる徳を以て、俗を化せんとして熱烈なる意志と信念とを携せて来れるに、汝は斯くの如き連なる山脈、斯の如き清涼なる大気、斯の如き平靜なる湖水、斯の如き生々たる緑松、斯の如き潔白なる白砂の海岸に、我等に興へたり。我等謝すに一言たになきを汝知れるや。我に汝は我等に特別なる恩みも興へたり。即ち此方なり。我等、汝の神説を知らんとして此燈火を知らんとしてそのなり。何事にも、我等人を知ら、他の生物にせたりし所以、それこそ有るべきに在りしや。此を免ても、汝、我等も如何に愛せよかは言語に託せり。夜の幕り、静かに音もなく我等を包み、亦しも息をせよと、我等に囁く。月が上天に在りて、汝々の向き光りて、我等の心を洗ひ、星は滿天に散らばりて、燦々たる青き光も、我等の心を洗ひ、風は湖上より来りて涼しくして自然の神説を語り、波は湖岸に奔せし聲をこしく天地を響かす。宜なる哉。斯の如き玉殿に於て、斯の如き玉音を聞く、我等の心、豈一臾の浮心を存せりと言はんや、我等の亦しき心に合はせて、波は天地の神法を奏し、我等の亦しき劇にならひて、風は自然の神説を語り。是に於ては我等の心は即ち天地の心、我等の言は即ち天地の言、我等の動作は即ち天地の一部、我等の振舞は即ち天地の舞法。是に於ては我等の友は二十餘にはあらざるなり。風、波、月、星、砂、我等はこれに在るもの、是は是れ我等を知己なり。之と語り、之と踊る。又快とせずして可ならんや。



田の塵光に目覚めし淡天の下の猛烈嵐、疾し水浴ケム、夜露西の空、比良の幸におつ時、そして訪れる夜の沈黙、香る月光の天幕の窓は、心にも時時他方照目、背に、歌の心ありつ、浄化の口へこの心、日々、は生かさんと願ふ。



手紙に十位色の古くあつた
あつたあつたあつたあつた

今あつたあつたと
あつたあつたとあつたあつた

あつたあつたとあつたあつた
あつたあつたとあつたあつた

